

## 令和5年度 日本語指導拠点校報告書 幟町中学校

## 1 学校の課題

帰国・入国生徒は生活言語の習得は比較的早くできるが、学習言語の習得には時間がかかる。そのため、日本語による授業で十分理解することが難しい。母語では年齢相当の学力を有する生徒であっても、評価評定は低いことが多い。進路保障の面の課題が大きい。

## 2 研究主題

グローバルな人材育成をめざして ～多文化共生を基盤とする日本語指導～

## 3 取組内容

※1の課題解決に向けて、重点的に取り組む項目とその具体

- (1) 日本語習得にむけての学習指導を中心に、基礎学力の定着を図る。
  - ① 日本語学習教室で、日本語と国語・社会など日本語に依存する教科の取り出し指導を行った。
  - ② 数学、理科を中心に入り込み指導を行った。「幟の学び」の中で、生徒同士が関わり合いながら学ぶための言語的なサポートを行った。
  - ③ 学級担任・教科担任はやさしい日本語の研修をうけ、わかりやすい言葉で話すよう心がけた。また、生活ノートや授業の提出物を用いて、日本語の指導を行った。
  - ④ 特別の教育課程で行った授業については学習内容に応じた定期テストを作成した。その他の教科についても、生徒の日本語能力に応じて、特別な支援を行った。
  - ⑤ 放課後や長期休業日に補充学習を行った。
  - ⑥ 取出しをしている生徒全員の個別の指導計画を作成した。生徒のその時点の日本語力の見取りとDLAの結果、生徒の経歴をファイルにして、日本語指導の進捗状況を、担任・教科担任が把握できる体制を整えた。
- (2) 日本の生活に適応できるように、生活面の指導に関して、家庭との連携を図る。
  - ① 家庭訪問や保護者懇談会は通訳と一緒に実施し、家庭との連携を図った。
  - ② 職員会や研修会を通じて、日本語学習教室が、生徒の母国の生活習慣や宗教儀礼などの情報を発信し、学校全体で理解を深め弾力的に対応した。
  - ③ 修学旅行や野外活動などの大きな行事の前には、持ち物や日程など保護者にわかりやすく伝え準備ができるように支援した。
  - ④ 学校から配信するメールの中で、重要なものは「やさしい日本語」で配信した。
- (3) 進路の保障のため、関係校や関係機関との連絡を密にして指導の継続性を図る。
  - ① 小学校からの進学、高等学校への進学および、他の中学校への転出に際して、「外国人児童生徒等日本語サポート引継ぎシート」を作成し、情報の共有と指導の継続性を図った。

(4) 学習状況を把握すると同時に、学校からの情報発信を行うなど、保護者との連携を図る。

- ① 特別の教育課程で行った授業については、別に補助簿を作成し、教科の評価評定とともに教科と日本語の学習状況を文章表記して保護者に伝えた。
- ② 保護者懇談会では、日本語学習教室での時間も確保し、生徒の日本語学習状況を保護者に伝えた。
- ③ 進路説明会は日本語学習教室で行い、通訳者とやさしい日本語を用いて日本語がわからない保護者にもわかりやすい説明会を行った。
- ④ 高校入試出願の手続きは、日本語学習教室で行い、保護者に寄り添って指導を行った。

(5) 日本語指導に関する関係校・関係諸機関との連携を密にして、情報交換を行う。

- ① 日本語指導拠点校の日本語指導コーディネーターがミーティングを行い、密に連絡を取り合い情報共有した。
- ② 小中の日本語学習教室連絡会を行った。中学校への進学がスムーズに行えるよう配慮した。
- ③ 国泰寺中学校日本語学習教室には、日本語指導コーディネーターが月1回の訪問を行い、情報共有した。
- ④ 市中研Ⅱ「外国人及び学び直し生徒等支援教育部会」に参加し、情報交換を行った。

(6) 日本語指導の拠点校として、帰国・入国生徒の理解・指導に関する研究の充実を図り、研究内容を、公開授業研究会や日本語指導コーディネーター通信で全市に普及する。

- ① 日本語指導公開研究会を行った。取り出し国語と入り込みの数学の授業を公開した。
- ② 4月に日本語指導が必要な生徒への話し方、教科担や担任が行うべき日本語指導、帰国・入国生徒への指導のポイントの研修をした。
- ③ 広島市内の日本語学習教室をもつ小中学校に呼びかけて夏季研修会を行った。
- ④ すべての教職員が帰国・入国生徒の指導や日本語指導の経験を持つように努めた。
  - ・日本語学習教室の取組をオープンにし、日本語指導が身近なものとなるように環境を整えた。
  - ・編入生の受け入れに関して、様々な立場の教職員に関わることで、外国から来た生徒を受け入れる経験ができるようにした。
  - ・定期テストの作成に際して、日本語学習教室が教科担任に対しサポートをした。「日本語がわからない＝学力が低い」ということにならないように、テスト問題にやさしい日本語等で書き込みをし、彼らが持っている日本語力でテストに取り組むことができるよう支援をした。そのことを通して、教科担任が日本語のサポートの必要性和、どのようなサポートが求められるのか気づくよう、教員支援を行った。
- ⑤ 日本語コーディネーター通信を全市にメール配信した。

## 4 検証結果

※成果指標の検証方法および結果

## 成果指標のデータ等

○学校評価アンケートで、「すべての生徒にとってわかりやすい言葉を使う、ゆっくり話す、はっきり発声する、正しい日本語を話すなど、生徒が授業に参加しやすくなるような話し方の工夫をしている教職員の割合。

**達成目標** 70%以上

**結果** 中間（8月）100% → 最終（1月）100%

**評価** すべての教職員が「話し方の工夫をしている」と答えている。年度当初の研修会でやさしい日本語の研修会を行った結果、教職員が意識していると評価できる。しかし一方で、普段の授業での授業者の話し方には「発声」「声の大きさ」「語彙の選び方」「話すスピード」など改善できる部分が多々ある。今回の学校評価は、研修会等で「すべての生徒にとってわかりやすく話すとはどういうことか」を的確に伝えられなかった結果であると評価する。  
したがって、来年度以降の研修では「話し方」について取りあげる必要がある。

○DLAで前回の値を上回る生徒の割合

**達成目標** 100%以上

**結果** DLA実施生徒10名については全員前回の値を上回った。

4名はDLAを実施できるレベルに到達していない。

残り3名は3月に実施予定。

**評価** すべての生徒が順調に日本語の力をつけている。しかし、習得のスピードはそれぞれの生徒の環境や能力によって差が大きい。課題となるのは、高校入試までに一定の日本語を習得できない場合である。今年度は、一名の生徒を日本語の十分な習得ができないままに高校へと送り出すことになった。

○日本語指導コーディネーター通信を全市に発信する。

**達成目標** 1年間に6回

**結果** 5回発信した。3月に6回目を発信する。

**評価** 外国人生徒等の指導について情報提供ができた。

**5 研究成果**

※成果・課題等

**成果****1) 公開研究会**

市中研Ⅱの授業研も兼ねた公開研究会には、小中高の教員と日本語指導協力者の合わせて約60名が参加した。取り出し授業（国語）と入り込み授業（数学）の二つを公開し、本校の取り組みについてご意見をいただいた。以前から日本語指導の小中連携は密に行ってきたが、高校の先生方が日本語指導の必要性を感じ、公開研に積極的にご参加いただいたことは大変意義深い。

**2) 日本語指導の環境整備**

- ① 日本語指導推進委員会で検討した内容を企画・職員会に提出し、日本語指導を全職員で行えるように環境を整えた。従来曖昧だった日本語学習教室の位置づけと取組を明確にし、全教職員で共有した。
- ② 個別の指導計画を教科担、学級担任、学年で共有し、指導に生かせるよう整えた。
- ③ 多文化共生を基盤とする学習環境  
「聴き合い」「学び合い」を重視する本校の取組は外国人生徒等にとっても学習の支えとなっている。生徒同士の関わり合いの中で支え合う環境は、日本語での理解が難しい生徒への大きなサポートとなっている。
- ④ 取り出し授業でのサポート  
取出しで行う少人数指導は、日本語の習得の場であると同時に生徒の精神的支えの場にもなっている。日本語学習教室で行うきめ細やかな担任や保護者との連携が、学級での居場所づくりや行事参加への意欲に結びついている。

**課題****1) 各教科の授業に日本語で参加できる力の育成**

多くの生徒が高等学校への進学を目指す中、卒業するまでにすべての授業に日本語で参加できる力を育成することが目標である。しかし、ほとんどの生徒が、日本での学習に意欲をもって取り組んではいるものの評価・評定では伸び悩んでいる。そこには日本語能力だけでなく、家庭環境や母国の教育カリキュラム、母語での学習状況、生育歴など複合的な要因がある。

**2) 日本語指導の経験を持つ人材の育成**

日本語指導は、「個別最適な学び」の実践の場であるが、個々の生徒に合わせた教材作りは難しく、経験豊かな講師の先生方が様々な教材を作り工夫して授業をしているのが現状である。

しかし、将来の広島市の外国人生徒の教育を考えたとき、若い先生方にも力を発揮していただきたい。日本語指導拠点校である幟町中学校で、経験豊かな先生方の実践から多くのことを学び、幟町中学校での勤務の経験を他校での外国人生徒指導に生かすことができる人材を育成したい。

日本語指導の経験は通常学級の授業でも役に立つという視点をもって授業づくりを進める教科担任や、帰国・入国生徒の受け入れ・指導に積極的に関わる若い先生方は、将来の広島市の帰国・入国生徒指導者のリーダーとなることが期待される。